

Wakayama University Tourism Update

Semiannual Newsletter of Tourism Education & Practice

WTU Spring/Summer 2024



Sharing Experiences

Contents ー目次ー

1. Reports ー和歌山大学観光学部生の国際 / 地域活動報告ー
2. Topics ー過去のイベントとニュースー
3. Future Events ー今後のイベント紹介ー

■ “第14回関西空港発「学生と旅行会社でつくる」海外旅行” グランプリ受賞

高橋 七海さん (14期生 / 近畿大学附属高等学校 (大阪府) 出身)



2023年10月28日(土)、インテックス大阪で開催された「ツーリズム EXPO ジャパン 2023 大阪・関西」内で、“第14回関西空港発「学生と旅行会社でつくる」海外旅行”の最終審査会が開催されました。一次審査を通過した7組の学生グループが10分の制限時間内にそれぞれの企画を発表する場です。その審査会において、私達の企画「ツカファンときめき大人の女子旅」がグランプリを受賞しました。宝塚で上映される作品の聖地ともいえるパリ、オーストリアの旅を計画しました。

この企画のはじまりはグループの1人が宝塚ファン、略して“ツカファン”であったことです。そのため、実際の“ツカファン”の声を反映しながら旅の行程を考え内容を練ることができました。今回の旅行企画は添乗員を伴うツアーであり、その利点をいかに活かすかやどう顧客の獲得につなげていくか等、一つ一つの内容についてじっくり吟味しました。企画作成はメンバー全員が対面で集まるのが難しく、毎回オンラインでのミーティングで難航を極めました。日本旅行の担当者の方やゼミの東先生、観光実践サポートオフィスの金岡さんのお力添えもあり、徐々に形になっていきました。提供側、顧客側、旅の前、旅の途中、また旅の後といった様々な視点に立つことによってこの企画をより良い内容にしていけることができたと思います。また、最終審査会でのプレゼンテーションを10分という制限時間内に収めるために伝えたい情報の取捨選択をしなければならなかったことも非常に大変でした。一文字の大切さを実感しました。

最終審査会当日は緊張や時間制限による焦りのためにうまくいかない点もありましたので、他のグループの素晴らしい発表の中でのグランプリ受賞はとても驚きました。しかし、それと同時に1枚1枚のスライドについて3人で何度も何度も話し合った時間が結果に繋がったことは本当に嬉しかったです。

今回、学生という立場で旅行会社の方と深く関わらせていただいたことや、観光に携わる多くの方々から私達のプレゼンテーションを評価していただいたこと、また他グループの皆様の素晴らしい発想や企画をお聞きできたこと、このような貴重な機会に恵まれたことに感謝致します。この旅行の企画を通して得た知識や経験は確かに私たち自身を大きく成長させてくれたと思います。この経験を活かしてこれからも頑張っていきます。

最後になりましたが、一次審査から最終審査の間ご指導いただいた皆様はこの場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。

➔ 観光学部 HP 掲載ニュース記事 <https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2023110100031/>

■ Sカレ (Student Innovation College) 2023 :

「未来が描けるノートづくり」プラン・テーマ1位 & 日本マーケティング学会賞受賞

番匠 柚月さん (15期生 / 愛知県立一宮南高等学校出身)



「Sカレ (Student Innovation College)」2023は、32大学38ゼミ552名の3年生による169チームが参加する学生インターカレッジです。そんな「Sカレ」に、私たち「べばぶる」は大阪書籍印刷株式会社の「未来が描けるノートづくり」のテーマで「漫画風景印ノート」を企画し、「プラン1位」と「日本マーケティング学会賞」を受賞しました。この企画は、自分のペースで旅行を楽しみ、自分だけの旅の記録を残すため、地域の名所や風景、ゆかりのある人物、特産物等が描かれている「風景印」を集めるという発想から生まれましたが、私たちにとって、初めての商品企画で決して簡単なことではなかったです。

最初に「旅行に行ったのに観光客が多くて残っている思い出は人が多く映った写真ばかり」「手に残る自分だけの旅の記録があったらいいが、自分で1から記録をつけることはハードルが高く続

かない」という問題を発見しました。そこで私たちは漫画形式で楽しみながら旅を記録することと、旅先で風景印を収集する事に着目しました。アンケート調査により風景印の認知度は20%とかなり低い一方で、70%の人が興味があるということを発見しました。そこで「秋カン」では、「色々な場所に行って風景印を集め、手元に楽しく思い出を残せる」商品を提案しました。しかし、結果は惜しくも2位でした。審査員の方から頂いたフィードバックから「実現可能性のなさ」が私たちの企画の弱点であることに気づき、そこから反省をし、市場調査をさらに徹底的に行い、専門家へのインタビュー、SNSを活用したプロモーションや、企業への商談、ポスター掲示の確約、商品を試作し実際に風景印を集めて使用してみるフィールド調査等、様々な活動を行いました。その結果、私たちの企画は「冬カン」で商品化権を獲得しました。現在、私たちは2024年度の総合優勝を目標に商品化に取り組んでいます。漫画風景印ノートが常識化すること、旅のおまけとして愛用してもらえることを目標に日々活動をしています。

最後になりますが、この活動では4人の連携が非常に鍵になっていました。発表直前ではプレッシャーや焦りから不安でいっぱいになることもありましたが、企画案を完成させるだけでなく、それを分かりやすく魅力的に相手に伝えること、大勢の人前でプレゼンをするという緊張等、様々な壁を4人で乗り越えました。さらに、佐野楓教授初め、他のゼミ生、ゼミの先輩方含め様々な関係者のおかげでここまでたどり着けることが出来ました。実際の商品化への権利を手に入れることが出来たこと、自分たちの活動が商品として形になることを大変嬉しく思います。佐野ゼミに入りこのような挑戦が出来たことは、今私たち4人の自信となっています。優勝できたことを最終ゴールとせず、責任を持ち、多くの人に愛される商品が出来るよう最後まで試行錯誤し続けます。

➡ 観光学部 HP 掲載ニュース記事 <https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2023121100013/>



■ Global Intensive Project (GIP) - Global Learning Activity :

～ Intensive English Learning at Griffith University (Griffith University, Griffith English Language Institute (GELI))

柴田 妃楽さん (16期生/愛知県立豊田北高等学校出身)

2023年度のオーストラリア GIP は、3回生1名、2回生6名、1回生1名の合計8名が参加しました。今年度も昨年と同様に、オーストラリアの北東部に位置するクイーンズランド州のゴールドコーストに8月11日から9月17日までの約5週間滞在し、グリフィス大学附属語学学校である Griffith English Language Institute (通称 GELI) で英語を学びながら、現地での生活を満喫しました。オーストラリアは日本と季節が逆なので滞在中は冬でしたが、ゴールドコーストの日中は23℃ほどで、雨もほとんど降らないので、とても過ごしやすい気候でした。

語学学校では、平日の9時から13時半まで、30分の昼休憩をはさんで2時間×2コマの授業を受けました。授業はレベル別にクラス分けされており、自分の実力に合った内容で無理なく楽しく学ぶことができました。グループワークやディスカッション、プレゼンテーションの機会が多く、英語を話すことへの苦手意識や抵抗感がなくなり、自分の意見を英語で伝える力がつきました。また、ライティングの時間には、論文の構成での文章の書き方を学び、毎週先生に添削してもらった機会があったこともあり、4技能すべての力を伸ばすことができる授業内容だったと思います。8月中のクラスは日本人の学生ばかりでしたが、9月に入ってからのクラスでは、韓国や中国、タイなど様々な国の出身の学生と一緒に学ぶことができ、英語でコミュニケーションを取りながら、自分とは違う価値観や考え方に触れたり、他国の文化について知ることが出来たりと貴重で有意義な時間でした。遠足などの授業内アクティビティや放課後のイベントもあり、たくさんの留学生と交流することができました。



(次ページへつづく)



授業が午後の早い時間に終わるため、近くにたくさんあるビーチやショッピングモール、カフェなどに遊びに行ったり、公園でBBQをしたりと、充実した放課後を過ごしました。また、休日にはBrisbaneやCurrumbinなどの近郊都市を観光したり、テーマパークに遊びに行ったりとたくさんの思い出を作りました。特にBrisbaneは歴史と現代感が融合したおしゃれで自由な街で、私たちのお気に入りの場所になりました。

滞在中はホームステイで、とても温かく迎えていただきました。最初はオージー特有の英語の発音やスピード感到戸惑いましたが、優しくゆっくりコミュニケーションを取ろうとしてくれて、段々と意思疎通はもちろん、楽しくおしゃべりができるようになりました。滞在初日から実家のような安心感があり、一緒に料理をしたり、夕食後にデザートを食べながら映画やテレビを見たり、休日是一緒にお出かけしたりと楽しい時間を過ごすことができました。寂しくて帰らなくなるほどに仲良くなることができ、私にとって新しい帰る場所ができました。

5週間のオーストラリアでの生活を通して、英語力の向上や自信がついたことはもちろん、他人の目を気にしすぎず「許し合って生きる」というオーストラリアの自由な生き方に触れて、価値観が豊かになったと感じます。様々な学びや経験、そして素敵な出会いに溢れた充実した5週間でした。この経験を今後活かしていきたいと思います。

■ アメリカ交換留学を通して学んだ生きることの意味

花井 佑果さん（14期生／大阪府立住吉高等学校出身）



2022年の8月末から2023年の5月にかけての約9か月間、私は和歌山大学の交換留学制度を利用してアメリカのマサチューセッツ州にあるブリッジウォーター州立大学に交換留学をしました。ブリッジウォーター州立大学は、2024年のWall Street Journalの全米トップ大学にランクインしており、教育水準の高い国立大学です。私は高校生のころから英語が好きで、留学することを一つの目標にしていました。観光学部に入學し、より英語能力を高めたいと思ったこと、また、大学で観光学を学ぶうちに、かねてより興味があった哲学について勉強したいと思うようになったことが交換留学に応募した主な理由です。



留学先では、社会学、人類学、ジェンダー論、哲学など、さまざまな授業を受講しました。特に私が興味を持ったのは、哲学の実存主義です。実存主義は、「私たちは何のために生きているのか？」という問いから始まります。実存主義論者の一人であるジャン＝ポール・サルトルは、人間が生きる意味は誰かに与えられるものではなく、自分自身で作るものだと主張します。私の留学は、このサルトル的思想から出発しました。私が留学した理由の一つとして、日本における女性への固定観念から自由になるというものがありました。周囲から見ると私は日本人なので、そのことが、私が作り出す意味に影響することにショックを受けました。しかし、サルトルのパートナーであるシモーヌ・ド・ボーヴォワールはこれに対し、私たちはお互いが作り出す意味に依存しながら自分の意味を作り出すと主張します。つまり、アメリカにおいて、人々が「アジア人女性」に対して抱く一般的なイメージは、私の意味を作ることを妨げるのではなく、再形成のために必要不可欠なプロセスであるということです。私が日本人女性として存在しているからこそ、アメリカにおける障壁に気づき、考えることができた。そしてそれが、私が存在する理由そのものだったということを、この留学を通して学び、私の卒業論文における研究テーマとなりました。



私が留学中によく聞いたのが“step out of your comfort zone”（心地の良い場所から外に出よう）という言葉です。日本の社会的規範からの離脱を目標としていたとはいえ、住み慣れた土地を離れることはとても不安でした。Comfort zone（心地の良い場所）から出るということは、留学だけに限らず、自分をとりまく環境に気づき考え続けていくことであり、それ自体が生きる意味になるということをこの留学を通して学びました。最後になりましたが、この留学を支え、可能にくださったサポートオフィスの皆様や学部の先生方、家族や友人に、この場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

■初めての海外生活に挑戦中！！

竹下 晴香さん（16期生／大阪府立住吉高等学校出身）

私は、2023年の9月から、韓国の慶北大学で一年間交換留学生として学んでいます。慶北大学は韓国南部にある大邱という都市にあり、ソウル・釜山に続く第三の都市として知られています。そのため、交通機関も整っており、治安も良いため、とても過ごしやすいです。また、慶北大学はとても広く、図書館や食堂、寮など設備が整っており、大学生活を通して学びを深めたいと考えている学生に手厚いサポートをしてくれます。留学生に対しても、学期に2度ほどフィールドワークを開催し、留学生と現地の学生がペアになり韓国での生活をサポートしてくれるバディ制度があり、初めての海外生活でも安心して過ごすことができています。

私は語学留学という形で韓国に留学させていただいており、主に韓国語や韓国の文化について学んでいます。私の留学の動機は“韓国のアイドルが好き！”、“韓国ドラマを字幕なしで見られるようになりたい！”というような趣味の延長線上にあるような理由でした。その上、留学に来た当初は、一人ではお店で注文も出来ない状態で、今思うと、事前にもっと勉強しておけば良かったと思う毎日です。しかし、韓国での生活も6か月が過ぎ、まだまだ完璧ではないですが今では韓国語で日常的な会話ができるようになり、現地の友達も沢山作ることができました。自身の成長も日々実感でき、日本で生活していれば会うことの出来なかった人たちに会い、多くの経験をする事ができ留学を決めた自分や応援してくれている家族に感謝しています。

慶北大学の特徴として、多様な国の学生が学びに来ているという点が挙げられます。慶北大学には学期ごとに200人ほどの留学生が訪れます。しかし、そのうち日本人は10人ほどで、ヨーロッパからの留学生が大多数を占めています。そのため、韓国の文化だけでなく様々な国の方々と関わる事ができ、文化を体感することができます。アジアに関心を持っている学生も多いため、英語が苦手な私でも日本のことを知りたいと言ってくれ沢山の学生と交流し友達も作ることができました。語学学習において友達を作ることは言語を話す機会にもなるうえ、もっと“この子と仲良くなりたい！”、“上手く話せるようになりたい！”と自身の学習意欲の大きな要因になると強く感じました。また留学を通して、知らなかったことを知る事で自分の世界を広げることができ、新たに挑戦したいことや今後の目標などが生まれ、自分の歩みを深めるきっかけになると実感しました。

3月から新学期が始まり、これが私にとって留学最後の学期になります。語学力は留学前より伸びたとはいえ、まだまだ目標には遠いので前学期同様に楽しみながら一生懸命生活していきたいと思います。



■地域の人達と共に考え共に活動する、箕島地区で私たちにできること

～地域連携プログラム（LPP）：ICTの活用による多世代で取り組むまちづくり（和歌山県有田市箕島地区）

荻野 明穂さん（15期生／岐阜県立恵那高等学校出身）

「地域を活性化させるために地域の人達と一緒に活動がしたい！」、高校3年生の私は、観光学部に入って地域連携プログラム（LPP）に参加し実践的な学びを得たいという思いを胸に、勉強に励んでいました。そして入学後、希望していた箕島LPPに参加し、今年度で3年目になります。

私の所属する有田市箕島LPPは、和歌山県有田市箕島地区を拠点として、有田市社会福祉協議会の方々と協同で活動しています。今年度はメンバーが2人と少人数ではありましたが、「ICTの活用による多世代で取り組むまちづくり」をテーマとしながら、柔軟に活動を行ってきました。このテーマは、一昨年度、地域の方と一緒に箕島地区の魅力や課題を発見することを目的として行った「オンラインまちづくりワークショップ」の中で挙げた地域の課題を解決するために、昨年度から掲げているものです。今年度は、昨年度から開催している「スマホ講座」に加えて、地域における防災意識を高めるための2つのイベントの企画・運営を行いました。



（次ページへつづく）



「スマホ講座」とは、スマートフォンを所持する高齢者の方々に、日々の暮らしや防災に関する情報を受信する方法をレクチャーすることを目的として開催しているものです。今年度は地域の公民館や有田市に協力を頂き、3回開催することができました。講座ではQRコードの読み取り方法、Wi-Fiの接続方法などの説明に加え、参加者の方の疑問やニーズに臨機応変に学生が対応しながら、マンツーマンで進みます。毎度、参加者の方から多くの喜びの声を頂くことができ、私たち学生も大きなやりがいを感じると同時に、地域における若い世代が主体となった活動に対する需要の高さを認識しています。

また、防災に関するイベントにおいては、地域で活動されている防災クラブ「マモツチャクラブ」の方々と協同で実施しました。6月に起きた豪雨被害を地域の方と振り返る「防災ワークショップ」を開催し、被害状況を地図に落とし込みながら、具体的な水害への備えや避難経路についての共有を行いました。また、ワークショップを受け、「私たち学生が、何か地域の防災意識を高めるために働きかけることが出来ないか」と考え、小学生を対象とした「防災まちたんけん」を実施しました。子供たちと一緒にまちを歩き、災害時協力井戸や、土のうステーションに触れ、その後クイズ形式で災害時の行動や備えについて考える機会を設けました。子供だけでなく、私たち運営側の大人たちも防災について啓発される良い機会となりました。

3年間の箕島地区での活動を通して、私が感じるものは何より、箕島地区の方々の温かさ、そして有田市社会福祉協議会の方々を始めとした、地域で活動される方の、地域をよりよくし

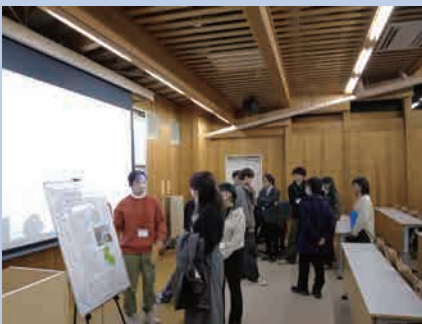
たいという思いです。私は和歌山県出身ではなく、俗にいう『よそ者』でした。しかし、地域の方々が温かく受け入れて下さり、私たち学生の意見や考えを尊重して頂きながら、これまで充実した活動をさせて頂くことができました。一緒に活動して下さっている地域の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。私たち箕島LPPの強みは、地域の実情に対して学生自身で課題、ゴール設定を行い活動できる、という点だと思っています。今後も箕島地区の地域の方々の豊かな暮らしづくりに貢献することを目標に、活動を行っていきます。

■ 2023年度LPP合同活動報告会：和歌山大学観光学部の「地域実践型教育プログラム」

中地 雄大さん（15期生／開智高等学校（和歌山県）出身）

野田 和貴さん（15期生／雲雀丘学園高等学校（兵庫県）出身）

野中 亮甫さん（15期生／和歌山県立橋本高等学校出身）



2024年2月1日（木）・2日（金）、2023年度LPP合同活動報告会が開催された。これは、今年度LPPとして実施している18のプログラムに参加している学生が一堂に会し、1年間の取り組みを広く共有するため、また学生が活動を振り返り自身の学びと今後の活動のブラッシュアップを図るために行われているものである。各プログラムの参加学生が制作したポスターを用いてポスターセッションを行ったほか、報告後には交流会を開催し、普段の活動内では関わることのない他プログラムの参加学生や受入先地域関係者の皆様などとのコミュニケーションを積極的に行う姿が見られた。

2日間の開催で、プロジェクト参加学生のほか、学部教職員や非参加学生、受入先地域関係者等を含め約200名が参加され、非常に有意義な時間となった。

【感想】

2日間を通してすべてのプログラムの報告を聞き、それぞれのプログラムの活動において発生した課題に参加学生自身が向き合い、各プログラム内や受入地域関係者等と試行錯誤を繰り返しながら、日々の活動に取り組んでいることと感じられた。また、他プログラムの報告に際し、自身のプログラムの活動内容を踏まえた質問をしている様子が見受けられるなど、今後の活動に向けての意気込みを感じることができた。（中地 雄大）

2日間を通して行われた報告会は、両日共に非常に有意義な時間であったと考える。

各LPPが1年間の活動を通じて得た学びや成果・課題点を発表したことで活動を振り返る良い機会になったと共に、他プログラムの発表を聞くことにより、今後の活動において参考にでき

るようなことも多く得ることができたため、相乗効果が期待される。また報告会後の交流会では受入先地域関係者だけでなく、参加学生が積極的に質問している姿が多数見受けられ、LPP や地域活動に対する熱い想いを感じることもできた。(野田 和貴)

この2日間行われた合同報告会では、各プログラムの「地域との関わり方」が非常に注目であった。日頃から「地域再生・活性化」が是であると学ぶことが多いが、現実とのギャップを痛感している学生も少なくはないだろう。地域再生・活性化だけが選択肢として存在するわけではなく、地域住民との「関わり」の重要性に気づいた学生もいたのではないだろうか。受け入れ先の姿勢や私たち学生の活動スタンスで、地域との関わり方が大きく変わることを、参加学生は身をもって学んだと考える。LPP の活動は、座学ではわからない現実を直接、学ぶことが出来る機会であると振り返る。是非とも、今後も活動を継続してほしいと切に願う。(野中 亮甫)

➔ 観光学部 HP 掲載ニュース記事 <https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2024010400085/>

■ ゼミ旅行報告：福岡県の海浜レジャーと産業都市について学ぶ

- 黒沼 優樹さん (14 期生/東京都立小松川高等学校出身)
- 青木 真結さん (15 期生/和歌山県立向陽高等学校出身)
- 井口 実南さん (15 期生/近畿大学附属和歌山高等学校 (和歌山県) 出身)
- 浦 芹穂さん (15 期生/和歌山県立向陽高等学校出身)
- 落合 真大さん (15 期生/大阪府立鳳高等学校出身)
- 西條 愛理さん (15 期生/明浄学院高等学校 (大阪府) 出身)
- 藤本 優衣さん (15 期生/大阪府立岸和田高等学校出身)
- 南谷 栞吏さん (15 期生/愛知県立名古屋南高等学校出身)

私たちは、吉田道代教授を指導教員とする観光専門演習 I (3 年生ゼミ) の活動の一環として、2023 年 9 月 26 ~ 28 日に福岡県を訪れました。この旅行の第一の目的は、福岡県の著名な海浜エリアや主要都市における観光・再開発の実情を現地で見学し、学術的に理解することですが、それとともに意識したのは、観光ガイドと観光客の両方の立場を経験することでした。そこで、2 人 1 組で半日分を担当し、旅程を考え、宿泊や食事場所を決め、アテンド役を務めました。

以下は、各日の行動と所見です。1 日目は、午後 1 時に博多市内に集合し、2 つのグループに分かれました。1 つめのグループ (黒沼・井口・落合・西條) の行き先は、福岡市のマリンワールド海の中道 (海の中道海洋生態科学館) です。建物内部の順路が分かりにくかったのですが、敷地面積 48,000 m² という九州最大の水族館で、見応えがありました。その後、シーサイドももち海浜公園 (人工的に作られたビーチ) を訪れ、さらにこの海浜公園や市街を一望できる福岡タワーに行きました。2 つめのグループ (浦・藤本・南谷) と吉田 (教員) は、インスタ映えスポットとして近年人気の糸島半島を訪れました。海岸にはブランコやハートのオブジェなどがあり、撮影の順番待ちの列ができるほど人を集めていました。一方で、オブジェによって景観が損なわれ、撮影だけで立ち去る人も多く、インスタ映えスポットによる観光客誘致は利点だけではないことに気づきました。

2 日目の午前には、福岡市の中心業務地区であり多くの百貨店や専門店、飲食店などが立ち並ぶ天神駅付近を歩きました。現在このエリアでは「天神ビックバン」という再開発プロジェクトが行われており、リノベーションした廃校を活用したスタートアップ支援施設「Fukuoka Growth Next」や高級ブランドホテル「ザ・リッツ・カールトン福岡」など新たな施設が次々と建てられてきています。このエリアの探訪を通して、アジアの国際都市への飛躍をめざす福岡市のエネルギーを体感できました。

午後には、青木が合流して博多駅から小倉駅まで特急ソニックで移動し、官営八幡製鐵所旧本事務所眺望スペースを訪れました。ここでは、ユネスコの世界文化遺産 (2015 年登録) に含まれる「旧本事務所」(1899 年竣工) の建物を眺め、モニターのビデオでその内装について学び



官営八幡製鐵所旧本事務所眺望スペース
(2023 年 9 月 27 日 吉田撮影)



門司港駅舎の前
(2023 年 9 月 28 日 吉田撮影)

(次ページへつづく)

ました。これ以外の施設はこの場所からは見えませんが、ボランティアガイドの説明によって、日本の重工業化初期の状況および関連施設の保存について具体的に知ることができました。

最終日となる3日目には、門司港レトロを見学しました。ここには駅舎をはじめとする数々の近代建築が残っています。その中には、旧門司税関や大連友好記念館などのように、建設当時の外観はそのままに、カフェやレストランとして使用されているものもありました。こうした建物を活かし、「レトロ」と名付けることで、古さを魅力に変えていました。

以上、自分たちでツアーの企画・引率を行い、気付いたことについて議論しながら歩く旅となりました。実際に現場に行くことで座学だけでは見えなかった多くのことに出会い、そこに新たな問いや視点、価値観が生まれてくるような経験を持つことができました。

Topics —過去のイベントとニュース—

2023 年度学位記・修了証書授与式が執り行われました



2024年3月25日(月)、2023年度学位記・修了証書授与式が執り行われ、観光学部生133名、大学院観光学研究科博士前期課程11名、博士後期課程1名が、それぞれ学士・修士・博士の学位を取得し、新たなステージへと旅立ちました。

和歌山ビッグホールでの学位記授与式、西4号館T101教室での各種表彰式(学部成績優秀者表彰、卒業論文賞表彰、修士論文賞表彰、ピアサポート表彰、学部長表彰・研究科長表彰、グローバル・プログラム(GP)認定証明書授与、観光学部教員表彰)等が執り行われました。

卒業生・修了生皆様の今後のご活躍を期待しています。

Future Events —今後のイベント紹介—

「LPP ガイダンス」「GIP ガイダンス」「GP2.0 ガイダンス (GP WEEK 2024)」を実施します！(学部内限定)



「地域連携プログラム (LPP)」「Global Intensive Project (GIP)」「Global Program (GP2.0)」のガイダンスを下記の通り開催します。

各プログラムの制度やスケジュール、参加申し込み方法などをお知らせします。

関心のある学生は、必ず参加して、情報を集めておきましょう！

*LPP、GIP の各ガイダンスは、全学年が対象です。

GP2.0 ガイダンスは、2024年度入学生が対象です。

*新入生ガイダンス/在学生ガイダンスで配布する「観光実践教育サポートオフィスからのお知らせ」も、ご一読ください。

■ LPP ガイダンス：2024年4月17日(水) 5限 @西4号館T101教室

■ GIP ガイダンス：2024年4月22日(月) 5限 @西4号館T101教室

■ GP2.0 ガイダンス：2024年5月13日(月)～17日(金) 各日12時30分～13時

@観光プロジェクト演習室2(西4号館2階 K208室)

編集・発行

(2024年4月発行)

和歌山大学 観光学部 観光実践教育サポートオフィス

〒640-8510 和歌山市栄谷930 和歌山大学西4号館K216室、K116室

TEL 073-457-8553 / E-mail tourism-er@ml.wakayama-u.ac.jp / URL <https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/>

*本誌はWebページからも閲覧できます→<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/fuzoku/tourism-education-research/wtu.html>

